

鶴亀

長唄

全詞章

杵屋六左衛門 作曲

〔シテ〕 夫れ青陽の春になれば

四季の節会の事始

〔ワキ〕 不老門にて日月の、光を君の叡覧にて

〔シテ〕 百官卿相袖をつらね

〔ワキ〕 其の数一億百余人

〔シテ〕 拝をすすむる万呼の声、一同に拝するその音は

〔ワキ〕 天に響きて

〔シテ〕 夥し

〔ツレ〕 庭の砂は金銀の、玉を連ねて敷妙の、五百重の錦や瑠璃の扉

碑礫のゆき桁

瑠璃の橋

池の汀の鶴亀は、蓬萊山もよろならず、君の恵ぞ

ありがたき

〔ワキ〕 いかに奏聞申すべき事の候

〔シテ〕 奏聞とは何事ぞ

〔ワキ〕 毎年の嘉例の如く鶴亀を舞はせられ、其の後月宮殿にて舞樂を奏ぜられうずるにて候

〔シテ〕 兎も角も計らひ候へ

亀は万年の齡を経、鶴も千代をや重ぬらん

〔二上り〕 千代の例の数々に、何をひかまし姫小松、齡にたぐふ丹頂の、鶴も

羽袖をたをやかに、千代を重ねて舞ひ遊ぶ

右に茂る呉竹の、みどりの亀も幾万代も池の面に、棲めるもやすき君が代を、仰ぎかなでて

鶴と亀

〔ツレ〕 齡をさづけ奉れば君も御感のあまりにや、舞樂を奏じて舞ひ給ふ

〔本調子〕 月宮殿の白衣の袂

月宮殿の白衣の袂、いろいろ妙なる花の袖

秋は時雨の紅葉の羽袖、冬は冴え行く雪の袂をひるがへす、薄紫の雲の上人の舞樂の声々に、

霓裳羽衣の曲をなせば

山河草木国土ゆたかに、千代万代と舞ひ給へば、官人輿をはやめ、君の齡も長生殿に、

長生殿に、還御なるこそ目出度けれ